

審査概評

令和4（2022）年度の学生懸賞論文には、3年生から15編、4年生から7編、合計22編の応募がありました。令和5年2月13日に審査会を開催し、審査委員4名の厳正な審査により、1等1編、2等2編、佳作5編の入選が決まりました。なお詳細な結果については、巻末の審査結果一覧をご覧ください。

1等1編は「保育・子育て支援サービスの地理学的受給差に関する一考察」（4年／立浪圭一郎）、2等2編（順不同）は「都市近郊水田農村における耕作放棄の発生と農地保全」（3年／江藤ひなた・智羽秀暁）、「のれんと将来業績の不確実性」（3年／佐藤芳紀・貞金葉月・瀬口仁太・西川賢佑）です。

今年度の学生懸賞論文の募集、審査会、表彰式の実施にあたっては、令和2（2020）年度以来の感染症拡大防止対策が続けられ、ファイルでの提出〔ワードとPDFでの原稿ファイルを個別ストレージに送信〕、ZOOM会議でのオンライン表彰式の形式を採用しました。ただし審査会のみ対面で実施し、審査委員が対面で直接意見交換ができるよう調整しました。

表彰式では、画面越しではありますが、審査委員、学生、指導教員は、いずれも顔を見ながらの有益な対話ができました。表彰式には佳作以上の論文応募者が出席し、卒業研究や3年生の共同研究の大変さを語ってくれました。アンケートや聞き取り調査といったデータ収集の手法をとったグループは特に、その苦労の印象が強かったようです。アンケートが終わって分析の段階に進んでから、アンケート項目に入れておけば良かった項目を思いついたり、集落の世帯への聞き取り調査の場合は事前に集落の中心的人物に協力を依頼して、その人物から集落の構成員に依頼をしてもらったり、といった体験が説明されました。幸い、各地で学生の調査にはご協力を頂けたようですが、もちろん、ゼミ担当教員の先生方のご指導のおかげでもあります。

今年度の論文の特徴として、以下3点を説明します。まず、調査型の論文では、前述のとおり従来通りの対面での聞き取りが可能になって、アンケート設計も含む事前準備の重要性が特に学生に意識されたことです。聞き取りの項目設定の重要性は、オンライン表彰式で、反省点の説明として語られ、他の学生にも共有されたように思われます。もちろん学生が調査できるアンケート母数にはつねに限界がありますが、有意の結果が得られるよう、調査の成果を図表に分かりやすくまとめること、結果を最初の仮説と照らし合わせて分析することなど、一連の研究手法について、もっと習熟する必要があるでしょう。

次に問題関心については、今年は「人材育成」や「キー・パーソン」の成長の促進、被災地での孤独解消、団地内コミュニティづくりといった、個人と集団に注目した「人」の経済活動が目されていたのが特徴的でした。従来の学生懸賞論文の論点では、取り上げられることが少なかったように思われますが、今回は、会社経営におけるマネジメントや自治体での活動、アルバ

イトのモチベーション向上と雇用主のアプローチの関係などが取り上げられています。経営効率や働き方改革に関する言説が身近に多かったせいでしょうか。学生の側からいえば仕事でどれだけ「成長」できるか、なかばオブセッションとなった「成長」というキーワードもでてきました。かつて「自己実現」と表現されたのと同質の関心事でしょうか。いずれにせよ先行研究紹介や準拠する理論的枠組みが明示されないと、分析が表層的に終わってしまう懸念がありました。

最後に、今回、一番目立ったのは、共同研究で、分担執筆の部分と全体が上手に統合されていなかったことです。執筆形式の不統一は当然目につきますが、なぜこのテーマを扱うか、先行研究はどのように展開されてきたか、そのためにどのようなデータが必要と考えているか、その上でテーマについてどうまとめるか、といった点で共通認識がまだ不完全でした。お互いの原稿を通して読んで、相互に理解しながら修正するという作業を必ず行うことで、こうした点は改善されます。

また文章表現力に関して、特に数式を展開しての証明の部分と、その問題関心を取り上げて説明する論述の部分の連関が分かりにくいものもありました。せっかくの共同研究ですから、こうしたほうがもっと分かりやすい、と言う提案を相互にできればより一層よいのですが、その部分で時間が足りなかったのかもしれない。

本論文集には1等1編と2等2編の論文のほか、佳作の論文要旨が掲載されています。いずれも新しい独自の問題関心から、手法は多様ですが研究対象を調査し、自分の分析視角から対象を解析し、仮説を検証しようと努力してくれました。佳作および選外の論文のキーワードだけ記載すると、サプライチェーン、再生可能エネルギー、宇宙ビジネス、日本水道事業運営、臨時労働者、IFIRS、孤独解消、団地内コミュニティ、MaaS、PBL活動、モンテッソーリ教育、アメーバ経営、資金管理、LINE公式アカウント、デジタル社会と経済安全保障、などでした。

毎年のことですが、先行研究の紹介と研究動向の説明が少ない、統計などのデータ分析がもっと正確な方が良い、図表にも参考文献・ウェブサイトにも引用したものは必ず出典・出所を明記しなければならない、脚注なり文末注なりもっと適切につけてほしい、執筆分担の表記法の統一やつなぎの文章を入れる工夫がほしいといった意見が審査委員全員から出ています。「論文執筆上の注意」は経済学部教育研究支援室ホームページで、再度確認しておきましょう。

このように、論文として形式上の不備も構成上の欠点もあり、未完成な箇所もありますが、学生の皆さんが集中して取り組んで形にしてくれた健闘を讃えたいと思います。3年生は来年自分ひとりで卒業論文を書く際に十分役立つ勉強をしたでしょう。4年生には、自分の問題関心を他者に共有してもらい喜び、仮説を構築する楽しみ、データを使用して仮説を検証する難しさを知り、社会に出て仕事をする際の備えにしてくれたらと考えています。

最後に、今回もまたお忙しいなか、懸賞論文のご指導をくださったゼミ担当の教員の皆様に、心よりお礼申し上げます。

(文責 審査委員 城戸照子)